

第26回兵庫県子ども・子育て会議

日時：令和3年3月15日

場所：兵庫県公館 大会議室

○会長

説明のあった来年度の事業に関して、あるいは、もう少し長期的、広域にわたるような問題提起、現状報告的なものでもご意見いただきたい。

○委員

兵庫県の出生数は全国に比べて、令和2年にすごく落ちている。過去、合計特殊出生率は全国平均よりも上回っており、今年、落ちるということは、出生率が全国よりもかなり落ちるといふことか。今後、この原因を分析していくのか。

新規施策を盛りだくさんに計上していただきありがたいが、あまり効果がなかったからやめた事業はあるのか。

今、国で社会福祉法の改正で、令和3年度から重層的支援体制整備事業として、行政・専門機関・地域住民みんなが寄り添って、地域で福祉の課題をそれぞれ解決していくための体制整備を進めていかれるということだが、子育ては、虐待、いじめ、障害者、貧困など、家庭的な問題があり、一つ一つの課題というよりも、いろんなところが集まって課題解決するのが一番いい。行政も結構、児童、障害、高齢者と縦割りなので、できるだけ一緒になっていただけるような体制整備を市役所にしていただきたいし、県にもご指導いただきたい。

○委員

交通安全の確保について、場所によってルールが変わり、子供が戸惑うことが結構あるのではないか。交通安全教室を開くときに、しっかりと統一した形で守れるも

のを出していかなければいけないと感じている。親に対してどう教育するかも非常に大事であると思う。

放課後児童クラブは、子ども達が外でのびのびと遊べる環境にはない状況で、体を動かすことに対して、どのように指導員が検証して取り組んでいるのか。

子どもの冒険ひろば、プレイパークはずっと長くやっていて、拡充されるのは大事なことだが、目的がどのように評価され、どう運営されていくのかを見て、めりはりをつけた支援や、メニューの提供をしていかなければいけないのではないか。

○委員

新型コロナウイルスの関係で、ICTに関わる事業の拡充や新規が目立つ。不登校の子がオンライン授業になったら生き生きとしてきたなど、一定の効果もあるので頭から否定するつもりはない。ICTは引きこもりの人にも活躍、あるいは社会とつながるといふ面での第一歩として意味があるのではと思うが、逆に何でもICTでやろうというと、本来、実際には対面が意味があったり、効果があったりするのにもかかわらず、全部ICTになってしまわないか危惧している。効果や変化、メリット・デメリット、本当に意味があるのかどうかを、時間はかかるかもしれないが、長期的に評価しながら、あるいは把握しながら進めていく視点が大事ではないか。

日本の虐待防止の政策はアメリカの方法をほぼ踏襲していて、今、里親をどんどん増やしていこうという方向に進んでいるが、虐待した親はおそらく何か働きかけても変化しないだろうから、里親が一番早く預けられるということで作ったようだ。特徴としては、すぐに預けられる里親を利用していることと、発見した後の対応になっている辺りが本当の意味での養護ではなく、批判されている面が最近ある。海外では、かなりたらい回しで、何度も何度も里親の間を行ったり来たりする事実もあるようだ。長期的な視野で、本当に里親委託をどんどん増やしてうまくいくのかも慎重に評価し、見極めながら進めていくことが大事ではないか。

○委員

生活困窮者自立相談支援事業の中の冒頭に、引きこもりなどの方々のアウトリーチ支援を実施と書かれているが、何歳ぐらいまでの子どもの引きこもりの人たちが対象なのかお尋ねしたい。

○委員

保育人材確保対策貸付事業費補助に予算がついていないが、これは必要ならば、その分を国から頂くことができるのか。例えば幼稚園でも預かり保育をしている事業所であれば、この給付、貸付事業を受けることができるのか確認したい。明石や神戸のように、子ども・子育てに対してお金をしっかりと回すことのできる自治体と、そうでない自治体との格差を埋めることのできる事業だと思う。

ところが、この貸付事業の存在がほとんど知られていない。これは、養成校の段階、あるいは高校の進学段階、高校の進路指導のときに、保育所の保育士になりたいならこういうのがあるよとアナウンスいただきたい。よく利用されている日本学生支援機構奨学金には返還義務があるが、この保育士修学資金貸付は5年間就業すると免除されることもあり、こういうのをどんどん使っていくことが大切だと思う。この内容をまず事業所に周知していただくことと、高校生の進路指導のときに、こういう制度があるから、希望するならこれを使ってしっかりと勉強しておいでとだけ言っただけ、そういう体制作りをぜひお願いしたい。

○委員

アウトリーチ型の育児相談事業、生活困窮者世帯・子どもを地域で支援など、アウトリーチの事業や子ども食堂なども多くなってきているが、行政ではなかなか担えないのでNPOに、という声がよく上がる。今までなら、例えば民生委員や主任児童委

員、家庭児童相談員といった人たちが地域の子供たちの見守りをしていたが、なかなか手が回らないため、NPOも一緒になってしてくれないかという事業が多い。

委託するだけではなく、ケース会議のように、地域や家児相、主任児童員など、関わっている人が家庭の支援をどのようにつなげていくか、どう深く掘り下げていくかの意見交換や情報交換できる仕組みを作ってほしい。

子ども食堂も、貧困家庭がどれだけいるのかを把握していないところもあるので、ただやればいい、任せていたらいいではなく、本当に貧困家庭や必要な子の支援が実現していけるように、行政とのやりとりをもっと深く、しっかりしていけたらいい。

○委員

子ども食堂の関係で意見を述べる。保育所、認定こども園を運営する経営者、施設長にも志を持つ方もかなりおられるが、自園の給食施設を使って子ども食堂を運営してノロウイルスや0-157が出た場合に、本来の業務である園児への食の提供に支障が出てはならないと二の足を踏む場合が結構ある。例えば、給食施設を保有している施設ではこうだけれども、こういうところに気をつけておけば、行政としては大丈夫だというようなガイドライン的なものを提示していただければ、積極的に踏み込んでいく方もおられるのではないかな。

これから少子化が否応なしに進んでくる地域もある中、福祉施設としての多機能化、地域での拠点の1つとして、地域の中で役割を果たしたいと思う施設長もいっぱいおられるので、施設部分だけではなく人材の課題もあるが、当面は施設の部分としての給食の提供、ある意味、危険性はこうやれば払拭できるというようなガイドラインを示していただければ非常にありがたい。

○委員

長い間、この会議に出させていただいたが、今期で退任することになった。団体

で世代交代をし、若くて現場でいろいろなことをやっている者がこの席に座らせていただくので、一番身近な声が届くと思う。

事業承継については、県外の大学に行き、就職した息子さんが帰ってこられるような環境が必要だがそこまではいかない。事業承継としてうまくつながっていている者、そこで出会いがあり、子育てをして、三世代、四世代と住んでいる者も中にはいる。コロナで倒産の数が増えると言いながら、それほど増えてはいなかったが、自主廃業がすごく多い。そこに若者が帰ってきて事業を承継することは厳しい話であり、なかなかうまくいってない。

資料を見ると、自身の子育て時と比べ、温かい施策ができています。四世代同居で子育てしてきたが、三世代でも助成金が出てうらやましい話だなと思うので、そこがうまく働いて息子や娘が帰ってきて事業承継してくれたらいいと思う。

また、兵庫県から若者がなぜ出ていくのか、なぜ若者が帰ってこないかの原因を追究しないと、次の策が打てないと思うので、次にここに座る、子育て真っ最中の者の意見を聞いてほしい。

○委員

保育人材の確保に関係して、高齢者へのケアワーカーや看護職も足りないと言われて、2025年には県の看護師は4,000人不足すると推計として出ている。日本の生産年齢人口が減ることは事実なので、どのように若者を引き寄せるかが課題である。

看護職も学校を卒業したら、半分ぐらいは他府県に行ってしまう。多くは大阪、東京に行ってしまうこともデータとして出ている。保育士も、なぜ出ていってしまうのかとか、様々な策を講じられても保育士も離職率が非常に高いと聞くので、その辺りも策を取りつつ、評価をしつつ、向かっていくことを考えていけたらと思う。

○委員

教育関係、保育士になるコースを選ぶ子はたくさんいるが、毎年のように保育士は足りない。職場でも募集をかけるが、その資格を持った人が集まってこない。年間、卒業している学生はどれぐらいいて、実際どれぐらいの人が入っているのか。

実習に行って潰れるとは多々聞く。今年、実習に来た4人のうち3人は保育士として、正職で入った。あとの1人は別の仕事を選んだが何でかなと思う。夢を追って保育士になろうと勉強し、実習で社会の一步を踏み出したところで、なぜ潰れてしまうのかと不思議でならないが、仕事としての大変さとは違う、理不尽さを感じたようだ。学生や学校を卒業してすぐの子に求められること、理想が実習の段階で結構高いのを最近感じた。

○会長

資格を生かした仕事に就く率を上げる、離職者を減らす、両方大事かと思う。

看護職も保育士も対人援助職の世界は全て、人材が集まらない状況になっている。いろんな要因があるが、人口の構造からして非常に大きな曲がり道に来ている。人口が多く、出生率が高かった時代の世代が年齢を重ね、例えば専業主婦が大半などと常識としてあった時代から大きく変わってきており、常識も本格的に変わらないといけない時代に来ている。

保育士のトレーニングも、上の世代がこれぐらいは当然やってもらわないと思っても、今の若い人にはかなり負担と覚えることがある。前はこれぐらい厳しいのは当たり前だったと上の世代が思うことは、ちょっと行き過ぎていたとも逆に言える。ある時代、精神論で必死でやってきたが、冷静に考えるとやり過ぎていた部分は修正していく、現在の世代にとって可能なものを作っていくと続いていかないことが、対人援助の分野だけでなく、スポーツ業界も教育全体も、特にそうなのかなと思った。兵庫県だけの話ではないが、そんなことも踏まえて、持続可能な、それぞれの子育ての現場を作っていくといけない。

子育て支援をされているNPO団体でも後継者がなかなか育たない。それも、今まで頑張ってきた方はほとんど、専業主婦をやりながら、やりがいのある仕事で子育て支援をしっかりとされてきたが、同じような形で引き継げる下の世代はなかなかいないという時代に来ている。じゃあ、代わりにどうするかを考えないといけない。

どこかで新しい形を作っていかなければならない時代に来ていると思う。またこれから、この会議でも現場のお知恵を、それから、若い世代の方に入ってくださいことも非常に大事だろうと思うし、活性化していける道を探っていけたらいいと思う。